

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
藤井 しん	女 性	20 代	中国黒龍江省甘南県 (新城市海老)

## 「やむを得ず中国に残ることに」

「東三河郷開拓団からの手紙」より

祖国を出てから50年になりました。私には身内もないので、内地から便りが来ることもありません。字を書くこともないので、文字も忘れて返事もどうかと思いますが、遠い日本から見知らぬ私に便りをくださったので、とにかく書いてみようと思ってみました。

東三河郷開拓団として三合屯に入植して4年目でした。戦争も人手が足りないのか、開拓団にも召集令状が来るようになり、私の家にも届きました。その時、家の家族は夫と子供二人の4人暮らしでした。夫はソ連の近くのハイラルという所へ兵隊として入隊しました。一度便りがありましたが、それきりでした。戦死したのですが、詳しいことは分かりません。日本の無条件降伏と共に、開拓団の団員も別れ別れとなり、自分で生活するようになりました。私は女一人で、二人の子供を連れていて、その日の生活にも困っておりました。二人の子供の食料もなく、病気にかかって二人とも死んでしまいました。とうとう私一人だけが残されてしまい、本当にさみしくなりました。

ある日、内藤良平さんが来られ、お前は中国人のところに行かないかと誘われました。日に日に寒くなればとても自分では生活できないだろう。日本から引き揚げがあれば、共に日本に帰ろうと言われました。いろいろ考えた末、冬になれば着たきりの着物しかなく、夜は1枚の布団もありません。とても一冬越すことはできないので、中国人の家に入ることにしました。

その家は4人の子供と主人と60歳ぐらいの老人と6人暮らしでした。私が母親代わり、後妻として入ることようなものでした。言葉が通じないので本当に苦労しました。4・5年たったある日、日本から引き揚げ命令が来たと聞きました。主人は、本当かうそか自分がチチハルに行って確かめてくると言いました。本当だったら戻ってきて、お前を日本へ帰れるようにすると言ってチチハルへ行きました。でも、それきりなかなか帰りませんでした。そんなわけで、私は日本へ帰る機会を失い、中国に残されました。どんなにあせっても、言葉が通じなくては何にもなりません。中国に居残ったわけはこういう次第です。

また、どんなことを経験され、何を見たのですかについてお話しいたします。八路軍とは中国共産党の軍隊で、毛沢東はその主席です。農民は4つの階級に区

分されることになりました。畑もありお金持ちの方は地主，二番目は富農，続いて中農，貧農とされました。土地を多く所有する者から土地を取り上げて土地のない農民に分配するため，地主や富農は闘争するための敵とみなされたのです。地主，富農は八路軍によって家の家財はみんな持っていかれ，貧乏な人たちに分けられました。お金持ちもなければ貧乏な家もなく，みんな平等にするのが共産党の目的でした。品物を持って行くのに，人をたたいたり人を殺してまでも無理やり持って行きました。この有り様を見た私は，同じ中国人なのになぜこんなことをするのだろうと思いました。私の家も富農でしたので大変な目に遭いました。私が33歳の時，八路軍にみんな持って行かれ，食料は一つも残してくれませんでした。家も小さな家と換えられ，一冬の間，毎日凍ったジャガイモばかりでした。秋になり取り入れが済めば穀物を食べることができますが，1年あまり野菜ばかり食べていました。今では毛沢東も亡くなり，時代も変わりましたが，日本の時代とは大変な違いがあります。これが私の国で見たみじめな中国人の生活でした。

血と涙，涙の50年の生活，今は体も弱りその日暮らしの人生となりました。何事も自分の運命とあきらめております。戦争を知らないあなたは，高校，大学を出て一人前になり，社会に出て生活するようになりましてら，世界の人たちと仲良くし，平和を守って下さい。戦争は勝っても負けても，その陰では子供を亡くした親，また親を亡くした子供が大勢いるのです。

平成2年11月

(記録者 今泉里枝さん)